序にかえて

公衆栄養学と私

女子栄養大学教授
公衆栄養学研究室　田　中　久　子

母校を卒業し，地方公務員になった。約30年間地方公務員として勤務した後，縁あって母校の教員になった。

卒業後，最初に赴任した保健所は成人病センターを併設していた。また保健所はエックス線検診車と栄養指導車を管理し，県北部の保健所を巡回していた。私の業務は成人病センターでの栄養相談，栄養指導車による巡回指導及び母子保健・結核業務が併任であった。成人病センターの栄養相談対象者は生活習慣病リスクのある方々であるが，話をうかがっても生活実態がよく見えず，訪問することで課題解決につながることも少なくなかった。農村女性の貧血改善では，農業改良普及所の普及員と農村を回り，若妻会に参加し農家や農村女性の生活を学んだ。地域に出ることは楽しかった。

栄養指導車（キッチンカー）での業務も同様であった。神社の境内や田んぼのあぜ道，山腹の集会所で集まってくれた方々と話しをしながら調理デモンストレーションを行うことは楽しく，緊張の時間でもあった。普段着のまま参加した女性達の会話や反応は，私にとって地域情報を把握するための大切な機会であった。また，住民目線の栄養指導スキルアップにもつながったのではと考える。この活動から，人々の食行動は環境面に影響されることを実感した。例えば，調理デモンストレーションで使った食材が食料品店からなくなることがあり，栄養教育において食材の入手可能性を把握することの重要性を知ったのは，栄養指導車の経験からである。ちなみに，栄養指導車は戦後日本の特徴的な公衆栄養活動である。日本はアメリカの余剰小麦を輸入したことに伴い，「栄養指導車の建造と運営で国民にバランスのとれた食事教育をする」ことが決められた。先輩栄養士からは，栄養指導車でサンドイッチのおいしい作り方を普及したと聞いている。栄養指導車窓口として，1955年に日本食生活協会が設立された。この協会は栄養情報ポスターを都道府県に毎月配布していた。掲載した献立作成メンバーは都道府県栄養士であり，私も数年活動に関わった。献立内容は地域性を活かすことを重要視し，食材や調理法，味付けも東西で異なっていた。先輩栄養士から厳しくご指導いただき，教材は正確・的確であることを強く意識するようになった。

また，就職当初，保健所では食生活改善推進員の養成として「栄養教室」が開催されていた。私はそこで，食生活改善推進員という食生活ボランティアの方々と出会った。このときから公私ともどもお世話になり，現在に至っている。以下，公衆栄養活動を振り返るとき，地区組織で一番関わりのあった食生活改善推進員について述べてみたい。

食生活改善推進員養成は，日本食生活協会が栄養指導車の事業を通して地域に根差した活動の重要性に気づいたことから1959年に始まった。養成講座は保健所栄養士が行い，テキストは日本食生活協会発行，内容は厚生省の施策が反映されていた。その後，養成・育成事業は市町村に移行した。会員は，ボランティア精神の強い，地域に影響力のある方々が多く，栄養士が発信する情報やスキルを住民目線に翻訳し地域に伝達していた。伝達には，持ち前の住民力で地域や組織に関係性を持ち，その実績は県民人口数の約1割（埼玉県）に及んだ。

行政運営や住民組織との関わり方は時代とともに変化し，住民ニーズの多様化とともに，行政組織に付随しない活動やライフステージに関連した活動，市民活動が成熟してできたNPO法人など多様な活動が増加している。さらに企業のCSV（Creating Shared Value）活動が進み，行政と協力体制を組むことも珍しくない。

これまで，公衆栄養学，公衆栄養活動を語る時に地区組織活動，特に食生活改善推進員は欠かせない存在であった。このような状況下で，食生活改善推進員が行政とともにどのような活動を展開するかの課題は顕著になっており，市町村行政のソーシャルキャピタル（社会関係資本）への熟成度が問われているのではと感じている。

公衆栄養学の洗礼を受けた最初の印象が強いため，このような内容になってしまった。

行政から教育・研究分野に移り，路頭に迷っていた私がこれまで教員として過ごせたのは，学内の多大なるご理解と教職員の皆さまのご支援のお陰と深く感謝している。今後も，引き続き地域と繋がっていたいと強く願うものである。